

# 漁業情報利用開発試験(ウオダス漁海況速報)

十三 邦昭・仲村 俊毅・中川 賢三・黄金崎栄一

## 調査目的

漁況、海況に関するリアルタイムの情報を漁業者等に提供する試験を実施し、情報の利用を促進することにより、漁業生産の安定もしくは拡大を図り、以って本県水産業の経営安定に資する。

## 実施概要

1. 発行間隔 5日毎(周年)
2. 情報項目 (1) 海況・①衛星画像 ②沖合の海況 ③沿岸定置水温  
(2) 漁況・①県内主要12港の魚種別水揚げ状況 ②県外漁況 ③スルメイカ、アカイカ情報  
(3) その他・①試験船調査結果 ②漁況、海況のトピックス ③魚の生態豆知識  
④漁海況長期予報 ⑤主要魚種累積漁獲量 ⑥流勢指標
3. 対象魚種(15種)  
(1)スルメイカ (2)アカイカ (3)ヤリイカ (4)ブリ (5)マグロ (6)イワシ (7)サバ (8)タイ  
(9)サケ (10)サクラマス (11)ウスメバル (12)イカナゴ (13)マダラ (14)ハタハタ (15)アブラツノザメ
4. 対象漁業および水域  
(1)定置網 (2)釣 (3)延縄 (4)刺網 (5)底曳網 (6)旋網及びその他の沿岸漁業で、対象水域は本県漁船の出漁海域

## データ収集方法

1. 毎日収集 (1) 試験船調査結果(無線-3隻)  
(2) 標本船の操業データ(無線-いか釣30隻)
2. 3日間隔 (1) 衛星画像(GJSCからFAX)
3. 5日間隔 (1) 県内漁況(電話-12漁協)  
(2) 県外漁況(電話-県外水試及び県外漁協5~6ヶ所)
4. 不定期 (1) その他の漁海況データ

## データ処理方法

1. 衛星画像  
海面温度分布をスクリーントーン張付、または等温線分布によって表示
2. 沖合の海況  
(1) 各県水試観測データから水温分布図作製

- (2) G J S C 漁海況速報の表面水温分布を利用
- (3) 衛星画像水温を利用

3. 沿岸定置水温 現況値、前年差、平年差

4. 県内漁況

日別水揚を集計し、5日毎に漁協別、漁業別、魚種別に表示、月1回累積漁獲量を掲載（4年間分について）

5. 県外漁況

日別水揚を5日毎に集計

6. その他—試験船、標本船の操業データを加工

<情報作成工程>

以上の作業→記事作成→原稿タイプ打ち→謄写ファックス→輪転機→出来上り

### 漁業者への提供方法

郵送主体であるが、ファックスでも送信している。

### 情報提供実績

昭和61年度中に漁業者などに提供した情報は、表1のとおりである。

表1 情報項目と速報（68～137号）に掲載した回数

情報区分	情報項目	回数	比率
海況 (定期情報)	① 人工衛星情報	10回	14%
	② 表面水温	60	86
	③ 下層水温	15	21
	④ 定置水温	70	100
漁況 (定期情報)	① 県内水揚情報	70	100
	② 県外水揚情報（スルメイカ、アカイカ）	56	80
	③ 県外 “ （定置その他）	38	54
	④ 試験船調査結果	15	21
話題その他 (不定期)	① 漁海況トピックス	29	41
	② 魚生態豆知識	26	37
	③ 漁海況長期予報	7	10
	④ 主要魚種累積漁獲量とその過去数年との比較	22	31
	⑤ 流勢指標（平年比過去3ケ年との比較）	9	13

### 漁業者の評価

1年目は県内全域でのアンケート調査を実施したので、2年目の今年は、海域および漁業をしぼ

って、津軽海峡の下風呂漁協のイカ釣漁業者を対象にアンケート調査を実施した。(1)

調査時期は5～10月までで、調査の対象者は10名、調査方法は「ウオダス、漁海況速報を直接、自宅へ送付し、アンケート調査への回答を依頼した。その内容の中で最も重要である「役に立ったかどうか」の設問に対しては、役に立ったが7名、参考になったが3名であった。

内容が何が一番役に立っているかという設問に対しては、①定置水温3名 ②沖合水温2名 ③人工衛星による潮境の位置2名 ④県内の漁況8名 ⑤県外の漁況9名 ⑥日本海スルメイカ情報9名 ⑦太平洋スルメイカ、アカイカ情報3名 ⑧スルメイカの話などの魚の生態2名 ⑨トピックス3名 ⑩試験船の情報7名 ⑪累積漁獲量2名という内訳であった。

今後とも必要と思うか、という設問に対しては、10名全員が引き続き利用したいと答えている。

発行期間については、今までどおり5日間隔と答えた人が6名、2～3日間隔がよいと答えた人が4名となっている。

### 問題点および今後の課題

ウオダス漁海況速報の内容をより充実させるためには、より広域的に、より正確に、より迅速に情報を提供することと、海況と漁況の短周期予測を実施することにあると考えられる。しかし、これには莫大な労力と予算が必要であることは論をまたない。

2年間、情報を収集し、提供した中で、問題点として考えられたことは

海況面では、人工衛星による衛星画像は表面水温に限られ、しかも雲などの影響で入手頻度が少ない。データがあらいため、沿岸には利用価値が低い。下層水温データが少なすぎるなどの問題がある。

漁況面では、漁業者から質の高い情報が入手できない。漁獲統計資料が整備されていない。対象とする魚種の知見が乏しい。海況と漁況の関連が明確でない。対象としている魚種が多すぎるなどの問題がある。

### 今後これらを解決するためには

海況面では、試験船および、標本船などにXBTなどの機器を設置して、沿岸観測回数を大幅に増やして行くことが特に重要である。

漁況面では、漁況収集には漁業者ならびに漁業団体の積極的な協力が必要である。また、研究機関においても海況と漁況の関連を明らかにするため、きめ細かな海況と漁況の資料収集と整備をはかるとともに魚の生態的研究を更に押し進める必要があろう。

次年度は、沿岸域を拡大するため、パソコン導入を図るとともに、予報についても短期予報について、より多く掲載して行くことが課題となっている。

### 参 考 文 献

- (1) 仲村俊毅他(1986) 組織的調査研究活動推進事業(風間浦村下風呂地区) 本誌
- (2) 十三邦昭他(1985) 漁業情報利用開発試験 本誌 昭和60年度 pp11～15